



有田誠(ありたまこと) 京丹波町在住の映画愛好家
写真は『生きるliving』の舞台となったロンドン市役所(1984年筆者撮影)

映画・本・歴史のこと

『生きる living』(1951)

黒澤明の『生きる』(一九五二)がイギリスでリメイクされた。東宝のマークから始まり、『The End』と終わるのがうれしい。

リスならビル・ナイが出ていけば、とにかく見る。大好きな俳優だ。前作が『Minamata ミナマタ』(二〇二二)の編集者役。『ラブ・アクチュアリー』(二〇〇三)では、落ち目の老いたロック歌手。『マリーゴールド

ホテルで会いましょう』(二〇二二)では、インドで同宿する年とったイギリス人たちの一人。『マイブツク ショップ』(二〇一八)では、漁村で書店を開いた女性におまかせで本を届けてもらう孤独な金持ちの老人と、暗い話から喜劇まで何でもあり。『ジョン・オブ・ザ・デッド』(二〇〇四)では、まぬけなゾンビまでやっている。この人が胃がんで余命半年宣告を受ける市役所の課長、志村喬の役を演じる。

のドップリ感を避けようとした製作姿勢が、逆にイギリス映画らしい。脚本を担当したカズオ・イシグロはノーベル賞の受賞講演でハワード・ホークスの『特急二十世紀』(一九三四)にふれている。ビル・ナイが転職したマーガレットと見る映画にも同監督の『僕は戦争花嫁』(一九四九)を選んでる。彼の小説に映画が大きく影響を与えていることがうか



『生きる living』のビル・ナイ(1949~)

小田切の快活さに触発され、人生最後のやる気を出す。途端に志村のお通夜の場面となる。この構成がすごい。あとは通夜の席で部下たちが故人の仕事を回想してゆく。この集団会話劇の面白さは類を見ない。

がえる。

『生きる』(一九五二)

見直すたびにどこをとっても、この映画の密度の高さにおどろかされる。まずは橋本忍、小國英雄、黒澤明による脚本のガツンリした構造が決定的だ。晩年の『八月の狂詩曲』(一九九二)、『まあだだよ』(一九九三)の食い足りなさは、黒澤単独の脚本のせいだと思ふ。

余名わずかの志村喬が、

それにしても、役者たちの演技がすばらしい。志村の息子役金子信雄ですら影がうすい。以下、何人かのエピソードを記しておく。

志村喬

この時、四七歳である。父が三菱生野鉱業所の冶金技師で朝来の生野生まれ。ちなみに橋本忍は下流の市川の生まれで、各々記念館が生地にある。祖父は山内容堂の臣下で、鳥羽伏

見の戦いで隊長として出陣している。「ゴンドラの唄」(ビル・ナイはスコットランド民謡「ナナカマドの木」を二回歌うが、マキノ雅弘のオペレッタ時代劇『鴛鴦歌合戦』(一九三九)でもたっぷり歌っている。共演のディック・ミネの推薦でテイチクからスカウトされたほど。

『男はつらいよ』には、博の国文学者の父親役で4本に出演している。中でも妻の葬儀に家族が備中高梁に集まる『寅次郎恋歌』(一九七二)は、小津の『東京物語』とほぼ同じ設定である。笠智衆も小津映画の中で何度も歌っている。尾道と高梁は直線距離で50キロばかり。



『生きる』での志村喬(1905~1982)

小田切みき

志村に生きるエネルギー



小田切みき
(1930~2006)

ーを与える市役所から転職する娘、小田切とよを演じる。以後、その役名を芸名とした。夫は安井昌二で、二人の子供、四方正美、晴美(四方は安井の本名)と家族でTBSの人気番組『パパの育児手帳』に出演。その後、晴美は同局『チャコちゃん』シリーズでさらに人気者となる。六〇年代の話である。

中村伸郎



中村伸郎
(1908~1991)

小樽で銀行頭取をして

いた小寺芳次の十一人きょうだいの末子。長女夫婦の養子となり、中村姓になる。父の中村悦は小松製作所の初代社長。こういう育ちから社会的地位の高い役が多い。『生きる』では何とも陰湿な助役で、救いようのない手合いを演じる。小津映画の愛すべき重役や大学教授と二本立てで見れば、そのうまさが見える。

宮口精二



宮口精二
(1913~1985)

中村の助役に使われるやくざだが、ワンカットだけで、ものすごくこわい。本所の生まれで父は大工というから、ほぼ江戸落語

の世界で育っている。久保田万太郎らの一九三七年文学座結成に杉村春子らと参加。一九七〇年から演劇季刊誌『俳優館』を41号まで発行した。ここから単行本化された一冊に中村伸郎の『おれのことなら放といて』(早川文庫一九八九)がある。宮口精二を詠んだ句がふたつ載っている。〈丁字匂う宮口精二と別れて〉

鰐

『男はつらいよ』には二本、小説家役で出ている。

その他、左ト全、田中春男、藤原釜足、千秋実、日森新一、木村功、伊藤雄之助、加藤大介など何ともすごい役者陣である。必見中の必見映画である。